追悼

古見用美さんを偲ぶ

池城安伸

奉仕とは「おのれ」を捨てて、「おのれ」ならぬものの為に尽くすことである。服従とは「おのれ」を捨てて、「おのれ」ならぬものの意志に従うことである。

（三太郎日記より）

奉仕の人・古見用美さんが一月二十七日逝去された。用美さんの訃報（ふほう）は私にとって、人間の生涯の美しさを思いおこさせずにはおかなかった。それは私の多感な境涯を支配して、胸深く生きている人間像であるからだ。

あれは昭和三十二年ごろだった。西表の片田舎も敗戦の後遺症は癒（い）えることなく、住民の生活も日々決して楽ではなかった。そんな困窮のなかにあって、当時の西表小中校の校長・川田丈夫は「窮寇（きゅうきん）の中で新しい路を拓くのは、怜悧（れいり）な人材の養成が求められる」と力説され、文教局指定の実験学校（現在の研究校）を引き受けた。

実験学校を引き受けたものの、当時、実験学校に対する行政の予算はわずかな金額で、実験学校に付帯する施設・設備はPTAに依存された。PTAに依存されたとはいえ、経済的余裕のない地域の実態は、会組織を統率して事業遂行する会長の成り手は辞退し、容易なことではなかった。

しかし校長の眼識は、その容易ならぬものを容易にする卓越したものがあった。一見、陶器にたとえると、うわぐすりをかけない素焼きの親しみを醸す、古見用美さんに白羽の矢をたて懇願したのである。用美さんは校長の申し入れを謙虚に受け止め、以後六度にわたって西表校のPTA会長を務めあげたのである。

実験学校当時の用美さんは、決して経済的に恵まれた方ではなかった。お子さん達は成長期で家族の反対もあったろうし、ほとんどが奉仕の会長職は、損得勘定を離れた仕事だった。でも用美さんは生徒たちの机の修繕から教室の環境整備、発電小屋造りと、手弁当で心血を注いだ。お陰様で情報の乏しい時代に村人の協力もあって、校内放送と家庭に設備された親子ラジオが連結され、家庭教育の助長に役立てたのである。

一方、用美さんは思想の人でもあった。思想とはまず人格を規定し、その人格を通じて、間接に客観に作用する結果を産むといわれるが、私は用美さんの人格を思う時、実現にせまる力のある思想を堅持し続けた人であったと思う。

著書こそなかったが、社会の新生は人材を育成する教育であることを理想として、行動したのだと述懐する。理想は実現に迫る力がなければ詠嘆にすぎない。用美さんの行動は、地位名誉を意識せず、あくまでも西表の在野の人として、学校教育の協力者として、自負を堅持し続けた人である。

また用美さんは学校教育に対する信念はもちろん、政治の分野においても一貫したものがあった。町議員時代の思想信条は革新を標ぼうして、生命の尊厳、平和に対する思いは人格の根幹をなすものだった。そして困苦を物ともせず、理想を拠擲（ほうてき）することなく、地域の幸せの為に生涯を費やされた人格の高潔さを私は忘れない。

晩年は、西表小中学校百周年期成会長を引き受けられ、子弟の教育環境造りに老躯（ろうく）に鞭打たれ、立派に事業を遂行されたことは、学校教育に対する己の初心を生涯、貫き通された証だと私は思う。記念式典での嘆（しゃが）れ声、眉秀でたあの風ぼうが私のお会いした最後だった。用美さんのかき上げた白髪の乱れと、眉の太さは西表人の象徴として私は忘れまい。

最後に良寛禅師の歌一首を献じて、ごめい福を祈ります。

「柴の戸の冬の夕べの淋しさは
うき世の人のいかで知るべき」

合掌。